

科目名	年度	レポート番号	クラス	学籍番号	名前
API 実習	2023	3	B	20121049	玉木悠斗

レポートは3ページ以上、5ページ以内とします。5ページを超えても構いません。ページ数や文字数よりも、わかりやすく書けているかどうか、点数アップの分かれ目です。改行で稼ぐ行為は減点対象です。

調査レポート名 AI時代の到来で変わるCEOの意思決定 (<https://www.ibm.com/downloads/cas/AAYNYWE2>)

調査レポートの要約

コロナ禍から気候変動、サイバー攻撃の増加、変化する従業員の期待に至るまで、従来の株主価値モデルや自身の経験をはるかに超える意思決定を強いられている。意思決定の円滑化や迅速化を図ることができるはずだとの指摘も聞かれている。AIは質問を投げかけられると自信を持って説明することが多いが、ハルシネーションである。汎用的なデータセットで学習を積んだAIはロジックに透明性が欠け誤情報を生み出す危うさがある。グローバル調査で、CEOが頼りにしているのは依然としてオペレーショナル・データと財務データだ。4人中3人が最重要の意思決定はデータだけでは行えないと強調している。組織の実績や健全性を網羅的に把握する上でも、指標は有用だと捉えている。中東やアフリカ、アジアの16カ国で、約450カ所の店舗を運営している。国籍の異なる消費者が混在する中、顧客需要に合った商品の品ぞろえに苦労していた。

システムの設計がしっかりしていれば、インサイトが劇的なスピードで得られ、誤情報を避けるために、作業内容を見せるAIが欠かせない。優れたCEOは社内チームと対話を重ねている。安全策を徹底したり、責任あるAIを推進したりすることが目的である。そのためには自社の価値観や基準に沿ったガードレールが必要となる。AIが陰に陽に職場を侵食するにつれて、人員体制の混乱に拍車がかかっている。従業員支援のビジョンのないまま行動しているCEOが、3人中2人もいる。組織として意思決定にAIを導入する準備ができているのかという点でも疑問を持たざるを得ない。CEOの10人中7人はメリットを全社的に幅広く及ぶとみている。AI導入に必要な専門知識が社内に備わっているとする幹部は、わずか29%だった。

サステナビリティCEOをはじめとする経営層の約50%が目標報酬を受け取っている。前年にはわずか15%にすぎず、この1年で大幅に増加した。トライアルホールディングスはエネルギー使用量の削減や脱炭素の取り組みを推進している。サステナビリティを巡る問題が複雑化している背景はその定義が広がり、組織としてどの指標を使用するのが適切なのかに確信が持てないこと。レポートについても信頼性に疑問が残る。サステナビリティでは追跡と測定が大きな課題だとの指摘は他のCEOからも聞かれ、サイバーセキュリティの効果を高めるには基準とガバナンスの一貫性が必要だ。

確信を持って将来を予見することは困難で、必要な場合は自分の力を信じて方向転換を図る。人間による作業にAIの力が加わるようになったことで、競争力の在り方に新たな動きが出ている。意思決定の質をさらに高めるための最善のアプローチ。先見の明があるCEOはおしなべて世界の将来について前向きな展望を持っている。その展望を実現するためには、AIの有効活用を優先的に進める必要がある。

自分の考えとして AI 時代が来ることによって以下のことが変わると考えられる。

一つ目として、データ駆動の意思決定です。AI は大量のデータを解析し、傾向やパターンを発見する能力があります。CEO は事実、指標、データを使用して、自社の目標、目的、に合致する戦略的なビジネス上の意思決定を導くことでより客観的で合理的な意思決定を行うことができると考える。

次に、予測とリアルタイム分析を AI は行うことができるので、現在の状態を分析し将来の傾向を予測することができる。CEO はそれらを参考に事前にリスクや機会を把握し、迅速に対応して今後の業界にも。リアルタイムの経営指標を把握することで、戦略の修正や新たな機会の発見が可能になると思う。また、リスク管理の向上を上げることも可能だと思います。AI は異常を早期に検知する能力があり、企業は事業リスクや市場変動に対してより迅速で的確な対策を講じることができると思う。

次に、情報の効率的な取得ができると考える。AI は膨大な情報を高速かつ効率的に処理できるので、CEO はより迅速に正確な情報を得ることができ、これに基づいて最善の状態を導き出して意思決定を行うことが可能です。意思決定の迅速化で AI は大量の情報を高速で処理し、複雑な分析を素早く行うことができるので、社長は迅速に正確な情報を手に入れ、これに基づいて即座に意思決定を行えると考えた。

次にチームとの連携を行う際に、協調型の AI ツールやプラットフォームを用いることで、CEO は組織内外のメンバーとより効率的に連携し、情報共有を行い正確なものを作り出せる。また、人的要因への配慮が変わっていくと考える。AI が業務を担当できるものが増えるので、CEO やリーダーシップ層は従業員との人間関係や創造的な業務に集中することができるので、人的な要因や社内文化への注意が、より強調される企業内での連携がよくなると考えられる。持続可能性と CSR（企業の社会的責任）の強化も考えられる。AI を活用することで、企業の持続可能な経営や社会的責任の向上が可能となります。社長はこれらの側面も考慮して意思決定を行うことが求められます。

最後に、新たなビジネスモデルの発見もできると思う。AI は市場や競合情報から新しいビジネスモデルの可能性を発見する手助けをすることができるので、これにより市場変化に敏感に対応し、競争力を維持するための新たな方針を打ち出すことができると思った。

ここでデメリットも少し考えてみる。自分が思いついたのは支出が大きいということと、失敗した時に誰に責任がいくのかわからないことがあるかも知れないということを考えてみたが、それらも支出は AI を入れることによってこれからのプラス面でも大きいと思ったそこまでデメリットではないと思う。責任もそれこそ CEO や現場リーダーなりが行うことでプラスに変えていくことができると思う。

これらの色々な要素からこれからは AI が社会に浸透していけばメリットとなることが多いので、AI が残り続けていくと思われるので、CEO の意思決定がよりよく最善になっていくのではないかと思う。

専門用語解説

生成 AI: プロンプトに応答してテキスト、画像、または他のメディアを生成することができる人工知能システムの一種

ハルシネーション: 人工知能が学習したデータからは正当化できないはずの回答を堂々とする現象。

オペレーショナル・データ：データを、検索など別の目的で利用するためにそこから抽出し一時的にデータを保持するデータベース。

インサイト:洞察や本質を見抜くこと。

サステナビリティー:持続可能性のこと。（持続可能性は、将来にわたって現在の社会の機能を継続していくことができるシステムやプロセス）

ガバナンス: 統治のあらゆるプロセスをいう。

意思決定: 人や団体が特定の目標を達成するために、ある状況において複数の代替案から、最善の解を求めようとする人間の認知的行為。

ロジック:論理など

ロードマップ: プロジェクトマネジメントにおいて、用いられる思考ツールの一つ。

モビリティ企業：自動車に関連する企業や自動車業界全体を指す言葉。

アプローチ手法: 目的を持って人に接したり、勝負を仕掛けたり、話をしたりするという意味

トランスフォーメーション: 「変形」「変質」「変容」という意味で、日本語に置き換えてデジタルによる（ビジネスや生活の）変容を意味する。

ユースケース: システムにおける活用事例のこと